第２章　古代～平安時代まで

歴史の勉強は、一般的には残された記録（古文書（こもんじょ）といいます）を調べて進めますが、文字などの記録がない時代は、残された貝塚や土器、住居跡などの遺跡を調べます。

枕崎市には、縄文時代・弥生時代を通して、47の遺跡が発見されています。特に、市の中央を流れる花渡（けど）川流域と支流の中洲川流域は、古くから多くの種類の遺物を出土しています。

鹿児島県では、縄文式文化が早く開けたところとして、北薩の大口・出水を中心とする地域、鹿児島市とその周辺の地域、南薩の知覧を中心とする地域の３つに大別されますが、枕崎にも多くの遺跡があるのです。

枕崎付近でも、７、８０００年前～１万年前ぐらいには、穴居生活や狩猟生活を営んでいた人々がいたのです。

ここでは、市の代表的な遺跡として、「松之尾遺跡」を取り上げます。

松之尾遺跡」は、花渡川河口の左岸に発達した海岸砂丘にあります。この砂丘は、標高22m、幅１００m、長さ６００mぐらいあって、遺跡は西側寄りに位置しています。数度に亘る調査の結果、広さは海岸寄りの約４０００㎡で、地表から約30cm～４mの地下に遺構や遺物があることがわかりました。壺形土器、高坏・坩などの多種多様な土器類、剣・刀子などの鉄器類が出土しました。

これらのことから、松之尾遺跡」は、弥生時代終期から古墳時代初頭にかけての埋葬遺跡であること、砂丘自体の活用は、弥生時代中期に求められることなどが判明しました。

また、松之尾遺跡」からは、南海産のゴホウラという貝を使った腕輪（下写真）も発見されています。弥生時代後期になると、貝に代わって銅が用いられるようになりますが、南九州では依然として、大型で加工しやすく光沢のある南海産の貝が、使われたといわれています。ゴホウラ製腕輪は、熊本県や福岡県の遺跡でも発見され、広がりをみせています。

かなり昔から人が住んでいたといっても、「枕崎で○○なことがあった」「○○という人が活躍した」など、具体的なことがわかるのは、まだまだ先の話です。

日本史では、4世紀に大和朝廷ができて、日本という国が徐々に広がりをみせていきますが、南薩地方が歴史に登場するのは、平安時代です。

平安時代は、藤原氏の勢力が衰えると、武士の平家・源氏の勢力が強くなりますが、平安時代末期には、南薩地方では、「村岡平氏」と呼ばれる一族が勢力を伸ばしていました。その中で、別府五郎忠明という人は、「別府」を領地としました。この「別府」は、今の旧加世田市・旧笠沙町・旧坊津町・枕崎市の地域の総称です。